

電子複写不可

記述史料

寄贈史料

八原博通

史受
昭 31.7.9
565

沖繩作戰記錄(改訂版) 對
補備及^レ作戰^レ對^レ所見

2300^c-11

沖繩
20

沖繩
史
20

防衛研修所 戰史室

右5

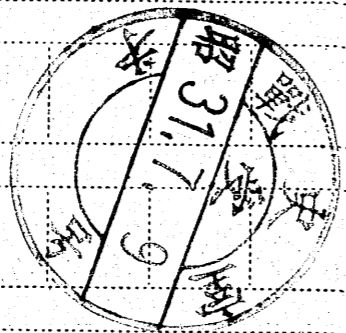
8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8

沖繩作戦記録（改訂版）に對する

補備及び作戦に對する所見

元第三十二軍高級參謀

元陸軍大佐 八原博通



沖繩作戦記録（改訂版）に對する

補備及が作戦に對する所見

一、補備訂正

一頁一行「新に編成せられ南西諸島」を

「新に編成せられ北緯二十八度

十分より東經百二十二度三分

に亘る南西諸島」に訂正す

二頁一四行の次行に「第三十二軍は以上の

任務、与えられ水兵^強んど意味を

を微弱な地上兵力、^{あり}やナ線

水リ^レ也挿入す
八頁七行^レ獨立混成第四十五旅團も亦獨立
混成第四十四旅團と共に海没^レ
を^レ輸送進抄せ^ルと訂正す
一頁五行^レ七月中旬獨立混成第十五聯隊
^レ也^レ七月中旬第九師團司令部、
獨立混成第十五聯隊^レに訂正す
二〇頁五行の次に左記を挿入す
沖繩本島に對する敵の上陸突判断
軍主力としては敵が何れの正面に上陸

し来たるも随所に之を棄滅し得る如く
作戦を準備せり然れども海岸の狀態
、既設飛行場及びが之に適地、港湾、上
陸後の地形、恒風の方向等敵上陸の爲
必要なる諸條件を考慮し作戦準備努力
の重実及び其順序を次の如く定むべし

一、沖繩本島南西部西岸

八天久台西北正面

二、沖繩島南岸港川正面

三、中城湾沿岸

四、其他正面

二二頁六行の次に左記を挿入す

實際の戦斗に於ては敵艦隊の主力は我が

航空特攻を避くる為夜間距離岸遠く退避せ

る為軍の夜間機動は著しく困難にはあら

ざりき

二六頁七行「大本營に」茅三十二軍……」を

「大本營より」茅三十二軍……」に訂正す

二八頁一行の次に「沖繩戦の悲劇此の時よ
リ始まるしを挿入す
三五頁一三行の次に左記を挿入す
此の了解に基き第三十二軍首脳部特に軍
作戦主任参謀としては敵が嘉手納方面に
上陸する場合之を攻撃することなく現在
の陣地に於て持久戦を實行する一大方針
は上下を通じ徹底せるものと思考せり
従つて攻襲に關する作戦準備は全然實行
せざりき

六〇頁五行の次に左記を挿入す
本状泥判断に於て軍隸下の他島嶼より沖
纒本島に兵力を移動集結せんとする著意
は動かし難き
當時第九師団を抽出せられたる直後とあ
り海上輸送は海中及び空中よりする危険
刻々増大しつゝあり最初上の島嶼毎の配
置と云う固定観念を打破る意志力は躍動
する余地なかりしなり
六五頁一行「玉砕するに至れり」を「玉砕

したるものと推定せり。に訂正す
六七頁一〇行の次に左記を挿入す
然るに敵は上陸準備砲爆薬間少きは十数
隻、多きは百隻内外の上陸用舟艇を次て
連日沖繩本島南半部西岸及び南岸湊川正
面に対し欺上陸を試み我が沿岸守備隊上
り厚く敵上陸を開始すとの報告を呈せり
八四頁六行の次に左記を挿入す
此の頃方面軍より次の如き通報あり
敵将は日軍軍を其の地下陣地に攻襲す

八七頁一行の「！」總攻事を開始すとの次に
之を盡滅すと高言しあり
本軍を甚の欲するが儘に行動せしめて
もすれば陣地外に蹤が出したる日
るは犠牲多く至難なるを以て今後は動
左記を挿入す
又海兵第三軍団を逐次第一線に増加し
我が第六十二師団の左翼陣地に對し猛
攻を開始す
八七頁七行の次に左記を挿入す

牧港附近よりの陣地崩壊を初めとし爾後
我が陣地の喪失は殆んど必ず陸海の接合
部即ち敵陸海軍の協同戦力の最集中發揮
し得る地矣が端緒となれり
八八頁の注に左記を挿入す
本夜襲は主陣地帯上に初めて生じた大破
綻を閉塞する為步兵第六十四旅団長に嚴
命を下し必ず之を奪還する如く督勵した
旅団長は二十一日夜飯塚少佐の独立歩兵

第十五大隊（仲西飛行場正面より安波茶
附近に輒進集結しあり）を以て安波茶方
面より独立歩兵第三十一大隊を以て域間
方面より攻襲せし如きの中間地区に在り
し歩兵第三十二隊の田川大隊、協同戦
斗中の臼砲第一隊の一部を此の攻襲
に協力せしめ、此の夜襲に於ては須川
中尉の歩兵砲中隊は砲車を馬に牽かせた
まゝ伊視域跡に侵入同地に於て独立戦斗
中の臼砲隊の一部約七十名と合流する

が如き奇蹟的成功ありしに拘らず主力歩
兵部隊は損害甚大にして攻勢不成功と報
告し來れり歩兵砲部隊も後援続かず二
十二日夜圍を破つて退却するの止むなき
に至れり
敵は夜間適當の線迄後退するを當とせる
を次て歩兵砲中隊の成功は此の間隙に乘
じて成功せるものなるべし又夜襲紛戦
の戦術思想も希望の理想論としては可なり
るも斯かる條件下の戦況に於て我が部隊

に之が実行の成功を望むが如きは至難な

九二頁
り

四行の次に左記を挿入す

前項より一字上げて

斯く作戦考察を進め、七軍高級参謀は

之が決定に稍々躊躇しありしが参謀長は

断乎として急速に之を実行する如く決裁

せり

又主力北正面集結の外に第六十二师団首

里附近、第二十四师団与座、八重瀬岳附

近、独立混成旅団知念半島附近と三嶽奥
防禦方式を檢討せり
一〇頁七行の次に左記を挿入す
前田、仲間地区の戦斗集団には歩兵第六
十三旅団所屬部隊の外歩兵第三十二聯隊
の志村大隊在り。此の集団の中心人物は
独立歩兵第十二大隊長賀谷中佐なり。又
安波茶附近戦斗集団は独立歩兵第三十三
大隊、独立機園銃隊第十四大隊、歩兵第二
十二聯隊の田川大隊（後、聯隊主力に合一

す)、海軍中村防空隊の一部にして此の
集團の中心人物は独立歩兵第三大隊
長山本少佐なり
兩大隊長共に勇敢にして戦斗指揮に長じ
部隊の戦力が其の指揮官の如何に依り差
異あることを実証せり
一三頁二行の次に左部を挿入す
此の時新鋭なる歩兵一ヶ隊を有したる
んが軍は当然天久台上の敵海兵軍団の左
側背に對し之が暴滅を目的とする局地的

逆襲を實施したる方らん

一 三二頁二行の次に左記を挿入す

傷者に就いては五月下旬首里戦線に在り

し重傷者は約一万と推定す 歩行者は問

題なきも然らざるものは之が後送並に新

陣地への收容は頗る困難（輸送機關及び公

洞窟の僅少）にして之が處置に困惑せり

軍としては残置の止むを得ざるものに就

いては特に命令せざりしも過半は最後迄

戦いて死し相当地数は敵手に入水り

糧秣に就ては軍は喜屋武陣地に全軍の約
一ヶ月分の糧秣を後送集積せり之に退
却に際し各部隊各兵が携行せるものをも
加算し更に給養額を半減せば二ヶ月間は
持久し得る見込なりき

三 沖繩作戦に對する所見

六頁一二行「²地上作戦準備」の項、地上兵
力に「い」ては次のようなる所見である

「各島嶼の兵力量は大本營之を決定せ
り」
一、一、身、四、行、よ、り、一、三、行、迄、に、對、す、る、所、見、
兵力配置決定の事情について
沖繩戦を基礎的に運命づけたる第三十二
軍の總兵力並に之が各島嶼への配置は
大本營之を決定せり
戦斗兵種は勿論
後方部隊の一中一小隊に至る迄固定的
な船舶輸送計画を以て示達せらるる第三
十二軍は作戦軍をこの自らの構想を具

現する能はざりき又爾後状勢の變輕
に亦じ是等展開兵力を必要の島に移動
集中する機動力を有せざりき
但し軍參謀長少將が就任直前南西諸
島を早急に一巡視察し是等の問題に就
いて一亦の竟を大奉宮に具申せる事
實あり又リヤナ線が崩壞に瀕しあり
し六月下旬予は防衛總司令部の平時的
会同に召集せられ大奉宮に在り此の際
並に七月上旬長少將が沖繩の軍司令部

に出頭せう水し時予の意見を徴せう水
しは「如何にせば」南大東島の危急を救
い得るか」に在りき 當時参謀本部、
西部軍等に於ては敵が「マ」中ナ線攻略
の勢いに乘じ「先」す速かに南大東島に足
場を求むるならんと「の」判断深刻にして
之が「対」策は「急」眉の急と痛感せう水た「り」
予は何れの場合に於て「も」次の如く「意」
鬼を具申せり

我軍が九州、南西諸島、台湾の有利

存る態勢を保持しある際敵が二
千料の洋上を越え之南大東島に先ず
立脚矣を求めんとすは我に好詞を
呈するものにして恐らく敵は斯かる
企圖に出でざるべし故に限りある
兵力を分散して南大東島を増強せん
よりは真に重要なる島に徹底的に兵
力を集結するを可とす
軍主力到着の状況について
第九師団司令部及び独立混成隊十五

隊は七月十日乃至十二日の間空輸に依
り沖繩に到着せり飛行場に降下せる
将士中敵は何處と絶叫するものあり
以乙苟略の緊迫せる空気を推察し得べ
し
歩兵第三十六隊を基幹とする部隊は
戦艦大和次下の海軍艦艇を以て先ず中
域湾岸に急送し次を機帆船に依り大東
島に輸送せり

第九師団主力は七月中旬沖繩に第二十

八師団主力は七月下旬宮古島に次ぎ茅
二十四師団、第六十二師団は夫々八月
上旬及び中旬に逐次沖縄に上陸更に大
小各種の部隊無事南西諸島嶼に上陸し
九月初頭には大本營の企圖する兵力は
概ね展開を完了せり
次上の諸兵団は当初より其の全計画を
唯うかにすることなく逐次増加せられ
たるを以て軍の作戰計画は逐次変更の
止むなきに至り最終計画の決定せしは